りびんぐらいぶず　令和3（2021）年4月第1号

浄土真宗のこれから（称名破満釈）

◆ご讃題

しかれば、名（みな）を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の志願を満てたまふ。称名は則ちこれ最勝真妙の正業なり。正業は則ちこれ念仏なり。念仏は則ちこれ南無阿弥陀佛なり。南無阿弥陀佛は即ちこれ正念なりと、知るべしと。

(Ref『顕浄土真実教行証文類』「称名破満釈」、註釈版聖典 p146)

◆はじめに

昭和二一年制定の宗制は、今日に大きな難点を残してしまっています。

法然聖人のみ教えをお伝えしようとなさったのが親鸞聖人であり、一方、親鸞聖人のみ教えを浄土真宗として浄土宗と峻別してお伝えしようとなさったのが覚如上人であり、「信心正因　称名報恩」として確立されたご法義になるのであり、「称名報恩」は、蓮如上人が機の上で受けとめる（機受）ご法義として頻用された用語だったからです。

その課題をそのままにせず、み教えを伝わり易くするのは今日の私達の勤めではなかったでしょうか。

「信心獲得」は、往生浄土の正（まさ）しき因であることは妥当だとしても、「称名報恩」では、称名を単に報恩の機能･次元で取りあげていらっしゃるからです。「信心正因　称名報恩」は、「信心獲得」に到る道行きを不明確にしてしまっているのにも関わらず、「唯信独達」として「信前行後の構造」に流れ易く、「称名」は、専ら信心獲得後の報恩感謝としてしまった（だから、信心獲得は困難となる）からです。

ここはどうしても親鸞聖人のみ教えの原点に立ち返り、粘り強くその論理構造をお訊ねし直してみる試みが必要であります。

まず、教巻から頂戴してみましょう。

『教行信証』教巻は、**「つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。」**で始まります。

「浄土真宗」とは、『仏説無量寿経』に説かれた衆生の浄土往生のための阿弥陀如来の選択本願（弘願）のみ教えであります。

◆大行釈に聞く

「往相」について行巻に、**「つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、則ち無碍光如来の名（みな）を称するなり。」**とあります。

「往相の回向」とある「回向」とは、阿弥陀様のお手許から衆生に回らし与えるお働きですから、阿弥陀仏のご本願が成就して、その功徳をお名号の働きに込めてお与え下さることになるのであります。

往相の回向の大行と大信とはものがらとしては一つであると梯　實圓和上から承ったことが思い起こされます。

「大行とは、則ち無碍光如来の名を称するなり」とお示しですから、大行の主体は、大行が働いて下さる場となる衆生であると同時に、本願成就された阿弥陀如来そのお方であることになるのであります。

嘗て、梯和上がお元気なとき、この一文には主語が記載されていない。この場合、主語は、衆生であり、如来様になるのだという日本語特有のギリギリの表現であるとお聞かせに与り痛く感服したことが蘇ります。

考えてみますと、「往相の『回向』」とあるのですから、大行は衆生にとり如来様より本願力回向された行業ですから、お念仏こそは、如来様から賜った行いを行ずるのだと認識して頂戴することこそ重要になるのだというロジックになるのであります。

◆称名破満（はまん）釈に聞く

行巻の**「称名破満釈」**という御自釈は、不用意に読み進めますとロジックがすり抜けてしまいます。ずっと小生もその通りでした。

しかし、桜井　鎔俊和上の春秋社刊『歎異抄を読み解く』を拝読しておりますと、p27～29 に有り難いお示しがあり、それによって改めて頂戴し直すことになったのであります。

本願力回向された称名（大行）を称える限り、衆生の一切の無明は打ち破られ、衆生の浄土往生の志願は、満たされるのです。

「名（みな）を称する」とは、衆生が「南無阿弥陀佛とお称（とな）え申すことであり、本願力回向の称名ですから称えることは、衆生にはその力はなくとも、そのままお名号の功徳をお称（たた）え申し上げることになるのであります（Ref『尊号眞象銘文（本）註釈版 p655』）。

阿弥陀様から往相回向された大行を頂戴して称えるのですから私が称えているように見えて、称（とな）え、ほめたたえる主体の本質は、阿弥陀様です。

「たまふ」とは、尊敬であり、阿弥陀様の働きを尊んだ表現だからです。

称名は、最勝真妙の正業（ただしいおこない）であると仰せなのです。

「正業（しょうごう）は、則ちこれ念仏なり」とは、衆生が称名するとき、鸚鵡か九官鳥の様に口先だけの称名を称えているのではなく、

① 第十七願の諸仏称名の主体は、諸仏であり、その本質的主体は、回向の主たる阿弥陀如来であり、

② お称（とな）えすることがそのままお称（たた）えすることであり（第十七願）（おたたえすることは心の働き）、

③ お称えすることは、心の中に阿弥陀如来そのお方を思い浮かべている（念仏=正念＝信心）ことになるのであり、

そうであるならば、

◆**「念仏は則ちこれ南無阿弥陀佛なり」**とは、驚くべき一文であります。

衆生が仏を称えるとか仏を念ずるのならば、「称南無阿弥陀佛」や「念南無阿弥陀佛」とすべきところですが、「南無阿弥陀佛なり」となさったのは、阿弥陀如来が主体と成って働いて居て下さることをお示しになったものだったからです。

阿弥陀如来から賜って称える称名の本質的主体は、阿弥陀如来だったのですから、そのとき、衆生の心の中は阿弥陀如来を思う心（信心）で満たされ、衆生の心の中では、南無阿弥陀佛のお名号が主体となって働いていて下さることになるのですから、「南無阿弥陀佛なり」とは、阿弥陀如来がお名号となって働いていて下さったのですよ」と認識を新たにして頂戴することになるのであります。

◆**「南無阿弥陀佛は即ちこれ正念なりと」**の**「即ち」**は、上から読んでも下から読んでも同じという意味で使われる言葉です。

されば、南無阿弥陀佛となって衆生を育てようと働いて下さるのが正念（御信心）であり、正念とは、南無阿弥陀佛（お名号）が衆生の心の中に宿ってお働き下さるお姿であるということになるのであります。

『称名破満釋』で、信心獲得に到る道行きを繰り返し実践的に頂戴することこそ重要だということになるのであります。合掌。

◆三月二十日（土）春の彼岸会　十四時、十九時半
◆四月三日（日）二十時～仏壮お聴聞の会
◆四月十七日（土）十九時半～仏婦お聴聞の会

著作編集兼発行元（本願寺派　正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職　堅田　玄宥